The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	傷つきやすさの現象学
Author(s)	浜渦, 辰二
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77129
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第３章　生殖における「間接性」
――父親と養親の視点から――

中　真生

はじめに

「母親」と「父親」という言葉は、私たちにずいぶんと異なるイメージを喚起する。それは単に「親」という言葉が喚起するものとも異なる。このことは、親というものが、女親か男親かによって、言いかえれば、そのジェンダーによって、現段階ではかなり差異づけられていることを示していると言える。しかし、だからと言ってそれは、女性と男性が生まれつき親としての異なる素質をもっているとか、子どもをもつとそれが自然に発揮されるというということの証拠にはならないはずである。この事情は、女性と男性一般の差異と同じであろう。現段階では、女性と男性では意味するもの、想起する事柄が異なるが、それは両者の差異が生まれつきであることや、変わらないものであることを意味しない。また、男女二つのカテゴリーしかないことをも意味しない。むしろ、性やジェンダーは、複数、あるいは無数にあって、はっきりとした境界の引けないグラデーション状であることについては、すでに多く主張されている。

本稿の目的は、このような「グラデーション」を、母親と父親の間にも見てとることにある。そしてさらに、生物学的なつながりのある両親とそうでない育ての親の間にも見て取ることにある。もちろん母親と父親の間に差がないわけではないし、それどころか、性による役割や規範の多くが、（じっさいになるかならないかにかかわらず）母親と父親にそれぞれ期待されることに関連していると言っても過言ではないだろう。両者の間には、現状では多くの歴然とした差があるように見えるにもかかわらず、そこに、不動ではっきりとした境界はない、と考えるのが本稿の立場である。具体的には次のように主張したい。母親と父親の間に、あるいは生物学的親と養親との間に境界線を引いて、両者の違いを強調する見方がじつは恣意的であること、境界はどこにもないか、あるいは母親のあいだ、父親のあいだ、そして養親のあいだにも無数にあって、産むか否か、血縁があるかないかという点だけに注目して、そのうちのどれかを強調することが恣意的であることである。特定の境界線の強調は、産ん

だ母親とそうでない父親、そして生んでいない[1]養親とのあいだにある連続性や、母親たち、父親たちのあいだにある差異を見逃したり、過小評価してしまう恐れがあるだろう。

このためにはまず、女性のみが子どもを産みうるという事実をどう考えるかということが焦点の一つとなるだろう。先取りすれば本稿は、子どもを出産することは、子どもとの関係を築く上での重要なきっかけのひとつではあるが、不可欠でも、核心にあるものでもない、と主張することになる。このため本稿は、産む母親の側ではなく、産まない親である父親や養親の側から考察していくことにしたい。妊娠出産に関しては間接的にかかわる父親や、あるいはさらに隔たったところにいるように見える養親の側から、母親へ、また生殖全般へと、通常とは逆に視線を投げかけることによってはじめて見えてくるものがあると考えるからである。

1. 妊娠出産という生殖の「核」

生殖における女性と男性とのあいだに強固な境界線を形づくっているその源をたどれば、それは、女性のみが妊娠出産するという生物学的事実であり、さらにそのことを生殖における核心に据える人々の見方であろう。妊娠出産、そしてそれに続く授乳期間のあいだ、母と子が物理的に一体であるか、産後しばらくは多くの時間密着し、授乳を通じてつながっていること、この身体的連続性がまず重視される。そしてそのために多大な労苦を要すること、（具体的には陣痛や出産時の痛みを頂点として、妊娠中のつわりなどの不調や不便、そして産褥期の体力の低下、ホルモンバランスの変化、ひっきりなしの授乳による不眠や疲労）、このような母子の身体の連続性とそれに伴う労苦が、生殖過程において特権的な位置を占めると考えられる。（というのも、あとで見るように、そのことが子どもとの、ほかの誰もかなわないもっとも緊密な結びつきを形成すると考えられているからである。）

この期間は、突き詰めれば、妊娠出産前後の約一年、授乳期間を入れても二年にすぎないのだが、神秘化され、象徴的な意味を付与され、実際を超えて肥大化した結果、その影響は、大した根拠もなく、この期間の前後に広範に及んでいるのが実情である。影響の多少を問わなければ、それはこの核を基点に、産むか産まないか、産んだか産んでいないかにかかわらず、女性の人生のほとんどすべてに、そしてそれがないといういわば「ネガ」として、男性

[1] 本稿では、「産む」という語を女性が出産するという意味で、「生む」という表現を、男女ともに生物学的に子どもの誕生にかかわった、つまり生物学的な親であるという意味で用いることにする。

の人生の多くにまで及んでいると言っても過言ではない[2]。

このようにして、妊娠出産しうる、あるいはしたという一点を根拠に、広い意味で生殖にかかわる多くが女性の側に割り振られてしまい、男性はそこに、近づきたくても近づき切れない隔たりがある反面、自ら距離を取りたいときには容易にそれが可能になるという、男女の非対称が形成される。言いかえれば、大げさではなく、妊娠出産という生殖の核を基点に、母親と父親だけでなく、女性と男性一般とのあいだにさえ境界線が延長され引かれてしまうのである。

さらに、産まれた子どもが事情によって別の人に育てられる場合も、やはりこの核を基点として、今度は産んだ女性とそのパートナーである生物学的父親が同じ側におかれ、育ての親はその核からさらに隔ったところに位置づけられ、両者の間に境界線が引かれる。こうして、妊娠出産しうる、あるいはしたという核を基点に、少なくとも二本のはっきりとした境界線が引かれることになる。じっさいに妊娠出産をその身体で経験したかどうかという、母親と父親を分ける境界線と、生物学的な親であるかどうかという、生みの親と育ての親を隔てる境界線である。(本稿では扱うことができないが、ほかにも、たとえばじっさいに産んだ女性とそうでない女性のあいだ、また子どもを生んだカップルとそうでないカップルのあいだにも、同様の境界線があるだろう)。

2. 生殖における男性の「間接性」

このように、妊娠出産そして授乳の一連の過程を生殖における核とみなす見方にしたがえばこそ、産む女性は自らの身体でそれを「直接」経験するのに対し、父親は、身体的には「間接」にしかそれを経験しえないという、一見揺るがしがたい、明確な境界線が立ち上がってくる。この見方をとったとたん、母親と父親のあいだに決して越えられない壁がそびえ

[2] たとえば女性は、幼少期から将来子どもを産みうる者とみなされ、妊娠前でも身体を通じた将来の子どもへの影響を懸念されたり、子どもを産む可能性を理由に就職やキャリア形成上の差別を受けたりすることがよくある。妊娠を望むのになかなか妊娠しないときには、不妊治療の主要な対象となり、出産後は主たる養育者として、長きにわたり子どもに心身ともに一番近い存在とみなされる。孫が生まれれば一番頼りになる助っ人とみなされうる。子どもを産まなかった場合でも、本人の意思にかかわりなく、そのことを強く意識して生きざるをえないほど、女性と産むことを強く結びつける社会的価値観のプレッシャーを被ることがある。男性は逆に、どれだけ子どもに深くかかわっていようと、女性がそう見られやすいように、子どもとのかかわりがその人の中心を占めるとはみなされにくく、母親と親権等を争ったときに圧倒的に不利になりやすい。反対に、子どもに対する義務から逃げたり、子どもに大して関心をもたなかったりしても、女性ほど責められることはない。次の拙稿参照。「「母であること」(motherhood)を再考する」、

立つのである。父親にとっては、産まれてくる子どもは生物学的に自分自身の子どもであるにもかかわらず、また心情面で産む女性に劣らない強い思い入れがあるとしても。この点については、自分たちの受精卵の代理出産を依頼したカップルも同様であろう。また心情面では、新生児養子縁組が決まっている養親[3]も、あるいは父親だけでなく、祖父母、場合によっては叔父叔母（伯父伯母）や兄弟姉妹なども、時に出産する母親と同等かそれを超える関心や愛着をもっている場合も考えられる。しかし、妊娠出産そして授乳という身体的過程に重点をおくかぎり、産む女性以外のすべての親あるいは養育者が、母親に比して間接的に、あるいは二次的（場合によっては三次的）にかかわる者とみなされることになってしまう。

しかし一番の問題は、あくまでもこのような妊娠出産・授乳という限定された期間の身体的な「直接性/間接性」が、産まれた子どもとの養育期全般に渡る関係の「直接性/間接性」あるいは「一次性/二次性」へと横滑りし、混同され、ときにすり換えられてしまう点にあるのではないだろうか。

そうだとしたら、問わなければならないのは、生殖における核は、本当に妊娠出産することそれ自体なのか、ということである。本来の核はむしろ、妊娠出産それ自体よりも、それを通じその結果として生まれ育つとされる、子どもとの緊密な結びつきなのではないか。つまり、妊娠出産と結びつき、あるいは結び付けられることの多い結果の方が、妊娠出産それ自体よりも重要なのに、このふたつは、あまりにも重なることが多いので、しばしば安易にほぼ同じ事柄の両面だとみなされてしまいがちである。そしていつの間にか、生殖の一番の核が、より見えやすい、生物学的な拠り所のある前者の方、つまり妊娠出産することへと横滑りして、そこだけに焦点をあてて理解されているのではないか。妊娠出産は、子どもとの最も緊密な結びつきという、生殖における本来の核の象徴としての役割を果たしているにすぎないのではないか。

（1）産むことを頂点とする親の「序列」

上のふたつが、論理的には全く別物であると認識することがまずは重要である。なぜなら、このふたつを経験レベルに、あるいは歴史的な多くの事例に基づく安易な推察から混同することは、論理的にはあらゆる人に開かれているはずの、子どもとのもっとも強い結びつき

[3] 望まない妊娠をした女性やカップルが、出産前や直後に赤ちゃんを養子縁組することを決める場合があり、養両親が出産前に決まっていることもある。

を、たったひとりの人に、そして二次的な結びつきにまで広げれば、たったふたりの人に限定してしまい、それ以外の人に、その結びつきへとアクセスする道をはじめから閉ざしてしまうからである。そしてその他の人々に残されているのは、二次的な結びつきか、あるいはそれよりさらに劣る結びつきだけであることになる。そしてつねに、妊娠出産を身体で直接経験した最高位の結びつきをもつ親（産みの親）のことを意識しつつ、それに及ばないことに、やりきれなさや引け目、申し訳なさ、あるいは諦めを感じることになりうる。こうして決してまたぎ越えることのできない厳格な序列を、複数の親たちのあいだに最初からつくってしまっていることになる。

イレーヌ・テリーは、フランスにおいてかつて、夫婦間の生殖に基づいた家族[4]が絶対のモデルとされ、そうでない家族、たとえば完全養子縁組（日本の特別養子縁組に相当する）や第三者が関与する生殖医療を利用した家族は、そのモデルに見せかけること、少しでも近づこうとすることが暗に求められていたと言う。

「わたしたちの社会はそうした家族[完全養子縁組や第三者が関与する生殖医療による家族]に、夫婦間の生殖に基づいた家族のように見せかけることを要求しておきながら、基準となるモデルの完璧さには決して到達できないと考えられる贋金のようなものとみなし続けてきた。こうして、生物学的親ではない人たちの心を苛む不安と正当性の欠如という感情が生み出されたのである」 (テリー 150)。

つまり、最初から乗り越えられない序列をつくっておきながら、同時に、最上位に位置する（婚姻関係にある）生みの親に少しでも近づこうとすることが望ましいとして、生みの親でない人たちを虚しい努力へと駆り立てていたというのである。

松木も、日本における養子縁組や第三者の関わる生殖技術、施設養護など、非実子、非家族的な養育を広く視野に入れた文脈で、家庭での実子の養育を頂点とする「序列」の存在を次のように批判する。

「非実子主義的あるいは非家族主義的なオプションは実子主義的かつ家族主義的な

[4] テリーや次に引用する松木らは、生物学的親であることに加え、（婚外子などを除外して）法的な夫婦であることが従来典型的な「モデル」とされてきたと考えている。本稿では、後者をめぐる問題については、複雑になるため措いている。

子育てがもつ引力にさらされている。この引力は、実子主義的かつ家族主義的な子どもへのケアを最善のものとする序列によって成り立っていて、第一象限［実親による実子の養育］以外の形態のケア［養子縁組による子育てや第三者の関わる生殖技術の利用、施設養護など］は、経験の面でも制度の面でも、第一象限より下位にあるものとされる。この序列によって、[...] 養親子関係は実親子関係に擬制され、[...] 子どもの妊娠・出産に関与した第三者の存在は忘れられるべきことになる」(［ ］内・傍線引用者・以下同様、松木 30)。

「養親が養子を「実子のように」育てようとすることは、それ自体が批判の対象になるべきではないにせよ、その環境や行為を「家庭的」あるいは「実子のように」と表現することには、それらのオプションを「模倣」におとしめる含意がある」(松木 32)。

本稿では、生みの親と育ての親のあいだだけでなく、母親と父親のあいだにも「序列」を見ているから、その場合、「序列」の頂点にいるのは、妊娠出産・授乳を身体を通して直接行った母親であることになる。そして生みの親ではあるが、間接的にのみこれらにかかわる父親がその次に、そしてそれ以外の「親」がさらに「下位」に位置づけられてしまうことになるだろう。

（２)父親の「間接性/二次性」に対する反応の両義性

では、当の父親たちは、自分たちが生殖過程に間接的にしか関われないこと、そして、そのことと連動しつつ、「二次的な」親と位置付けられることをどのように受け止めているのだろうか。父親にとってそれは、望ましいもの、納得できるもの、あるいは仕方ないと甘受するものにもなれば、疎外感やもどかしさ、引け目や非力感を抱かせることにもなりうる両義性をもっていると言える。子どもとかかわる喜びやそれが自分にもたらす影響に焦点が当たるときは、間接性は、疎外感やもどかしさ等の源となるが、逆に妊娠出産・育児の苦労や負担に焦点があたるとき、とりわけ望まぬ妊娠や不妊の場合、妊娠出産、中絶や不妊治療をその身に直接被る女性にとってそれは重い足かせである一方、男性にとって間接性は、そこから逃げたり、距離をとるのを容易にする。ただじっさい、ほとんどの場合、この両面は、混ざり合って共存し、時期や状況に応じて、そして何よりパートナーとの関係やパートナーの態度によって、どちらが優勢になるかはつねに変化しうることだろう。

『父親であることを理解する』でインタビューに答えた父親たちは、一面では、自らが、妊娠出産する母親に比べて「遅れて」親になること、また子どもの育て方を本能的に知っているか、あるいは妊娠出産・授乳という子どもとの身体的密接性を通じて「自然と」体得すると彼らが信じる母親と違って、自分は育児に関する「学習」を必要とする「初心者」(novice)であることを謙虚に受け入れる。つまり、妊娠から授乳までの自らの身体的なかかわりの「間接性」を根拠に、「二番目の」親であることを受け入れているように見える。「男性たちは、妻/パートナーがどのように母親をするか(mother)を本能的に知る能力があると信じて安心する」(Miller 55)かたわら、「自分が前もって父親の本能あるいは知識を持っているとは思わないこの領域において、自分たちを意欲的な学習者(willing learner)と位置づける」(Miller 58)のである。

しかし他面では、このかかわりの「間接性」と、それと連続させられている（と信じられている）親としての「二次性」は、積極的に生殖過程にかかわりたい男性に、「つながりの断絶(disconnection)、孤立(detachment)、否定、嫉妬の感情」(Miller 55)を抱かせもする。「男性たちは、女性や、女性の世話する自然な能力に密接に結び付けられてきた領域から、排除されていると感じ（あるいは実際に排除され）うる」(Miller 42)[5]。

子どもとのより深いかかわりを望んでいる父親にとって、自分が子どもを産んでいないという事実は大きな壁となって立ちはだかりうる。彼らは、つねにこの「間接性」と、言いかえれば子どもとの間にある、見えない隔たりと戦い続けなくてはならない。子どもに向かって、もどかしさを感じながら、霧をかき分けるように手を伸ばし続けなくてはならない。少しでも「本物の」親――産んだ親に近づけるように。

一方で、先にも触れたように、この間接性は、産んでいない者に、子どもとのかかわりから逃げる余地を、あるいは一定の距離を取る余地を与える。産んでいない者には「選択」の余地があるかのように。親になるかどうか、どの程度、どのように子どもとかかわるかどうかの選択の余地である。すぐに思い浮かぶのは、相手の予期せぬ妊娠を知って逃げ腰になったり、突き放す男性、あるいは子どもが生まれても相変わらず自分中心の生活を続ける父親などだろう。しかしそうでなくても、今は重要な仕事を抱えているから仕事に集中し、それが終わったらたっぷり子どもとかかわろうという、先に比べればずっと「ささやかな」選択や融通さえも、母親にとっては贅沢な手の届かないものであることが多い。

---

[5] 次の著作では、不妊治療の場で排除されていると感じる男性の経験を紹介し論じている。M.-C. Mason, *Male infertility,* Routledge, 1993

この両義性は、「男らしさ」というジェンダー意識を考慮に入れると、さらに複雑であることが分かる。なぜなら、「男性は、自分自身を育児にかかわる父親と位置づけ、「女性の役割に結び付けられてきた仕事をやることにもっとかかわる」ことを望むが、彼らはまた、深く根付いた、ジェンダー化された期待や実践に囚われてもいる」(Miller 78)からである。たしかに、日本を含めた多くの国々で、より育児にかかわりたい、情緒的にも子どもと密にかかわる「よい父親」でありたいと切望する男性が増加しているとされる[6]が、それはもうひとつの、「第一の稼ぎ手」(primary breadwinner)という従来の男性のアイデンティティを揺るがしたり、変化させるには至らず、両者は併存していることが多い。するとそれらは、しばしば互いにせめぎ合う。男性にとって、育児に積極的にかかわることは、「男らしさのヒエラルキー—そこではしばしば賃金労働が中心にあり、高く評価される—の枠組みに立脚し、その中で理解される自己同一性の感覚に脅威を与えるもの、あるいはその自己同一性を弱体化するものと知覚され、経験されうる」(Miller 42)。というのも、その枠組みでは「世話(caring)は、それが「自然」という理由で、簡単で、本当の仕事ではないと過小評価して見られうる」(Miller 42)からである。

男性が「第一の稼ぎ手」(primary breadwinner)という役割に固執するのは、現実的には、収入の減少を案じたり、パートナーをはじめ周囲の期待する責任から降りられないからでありうるが、もうひとつには、自らも賃金労働の場で得られるキャリアや達成感、そして賃金労働の結果得られる社会的経済的地位を手放したり、減じたりしたくないからでもありうる。多賀はこれを、男性が伝統的な「男らしさ」から降りられないからだと言い、メスナーの「支配のコスト」(costs of hegemony)という概念を用いて次のように説明する。

> 「長時間労働やそれが引き起こす最悪の結果としての過労死・過労自殺が男性に圧倒的に偏っているという事実は、労働市場における雇用・昇進機会とそこから得られる所得もまた男性に圧倒的に偏って配分されているという事実と表裏一体である。[...] つまり、これらの「生きづらさ」は、男性支配体制を維持し、そこから利益や権威を得るために、男性に負担が求められている「支配のコスト」なのである」(多賀 47)。

---

[6] 舩橋恵子「「仕事と育児」バランスをめぐる男性意識」, Miller, *Making sense of fatherhood* 他参照。

このように見てくると、男性が妊娠出産・授乳を担わないという身体的な「間接性」よりも、男性をめぐる、自らのアイデンティティを含めた社会的文化的要因が、男性の育児に対する「間接性」や親としての「二次性」を促進するように働いていると言える。この「間接性/二次性」をどう受け止めるかは、個々の男性によっても異なるだろうが、ひとりの男性の中でも両義的でありうる。賃金労働という「男性にとっての主要な責任」は、彼らにとって、育児中心の生活からの「「逃げ道」と認識される」(Miller 80)反面、出産直後に子どもとの密接なかかわりを形成した場合、そこから離れて、本格的に賃金労働に戻ることは、彼らにとって「つらい分離」と感じられもするとミラーはいう。

> 「[インタビューされた] 何人かの男性は、仕事に戻ることが「つらい分離」であることを予期している。そのひとりの言葉によれば、「「もっとも大きい恐怖」は、「[子どもと] 密着しすぎることだ。私はまだ稼ぐ必要があるのだから」」(Miller 79)。

（３）育児の二次的な責任

前節で見たように、ここ数十年ほど、他の先進国と同様、日本でも、より多くの男性が育児にかかわり、関心をもつようになっているが、そのかかわり方は母親のかかわり方と異なる場合が多い。現在でも、男性の育児への関与がもっとも大きい国でさえその相違は顕著であるという。父親は、(比較的年齢の大きい) 子どもの遊び相手や、勉強をみる、しつけをするなどの補助的役割であったり、遊びやスポーツをともに楽しむなど、自分の時間の空いた時に比較的自分のペースでできる「特殊な」かかわりが中心となることが多いが、「このケアのスタイルは、どちらかの親（あるいはだれか）が引き受けなければならない、すべてを含んだ(all-encompassing)、第一のケア/考える責任(primary caring/thinking responsibility)に、他の誰かが携わっているときのみ可能になる」(Miller 77)ことに注意する必要がある。つまり、毎日の食事や着替え、おむつ替え、泣いたり機嫌が悪いときのあやし、寝かしつけなど、日々の待ったなしの子どもの要求や必要に応える、育児の基底となる部分の多くを母親が担いつつ、母親が育児の全般を見渡し、「考え」ているからこそ、父親は「特殊な」、相対的に見れば、楽しくやりがいのある育児の領域を引き受けることができるのである。

「いくつかの研究で指摘されているのは、男性が育児により多くかかわるようになっているものの、だからと言って、男性が子どもの第一の (*primary*) 責任を担うことはあまりなく、

子どもとの特殊な仕事や活動にかかわることにより多くの時間を費やしていることである。しかもそれらの仕事も、依然として第一の責任を担うよう位置付けられる妻/パートナーによってアレンジされていることが多い」(Miller 33)。

ここで見られるように、もっと育児にかかわりたいという父親たちの希望は、必ずしも、妻/パートナーと同じように「第一の親」になりたいとか、「第一の責任」を担いたいということと等しいわけではない。じっさい、育児にかかわりたい希望が、家庭内での性別役割分業を解消することに直結するわけではないことが指摘されている[7]。

このように見てくると、多くの男性が二次的な親の役割を担っているのは、必ずしも、男性が生殖の身体的過程に間接的にしかかかわれないという生物学的性差からくるわけではないにもかかわらず、後者はしばしば、男性が育児に二次的にしかかかわれないこと、ときには排除されているように感じることを甘受する理屈として引き合いに出されたり、あるいは育児から距離を取るための自他への言い訳として用いられる。当の男性にとって、また周囲にとっても、半ば無自覚に、両者が連続するものと理解され、混同され、ときにすり替えられているのだと言える。このような混同やすり替えによって、父親と母親とのあいだに、動かしがたい境界が立ちはだかっているように見えるのだろう。

しかし、両義的な心情を抱くのは父親だけでない。母親もまたさまざまな両義的な葛藤を抱いているが、父親や養親に重点をおく本稿では、父親の育児への関与にかかわる母親の両義的な反応のみを取りあげてみたい。

（４）「母親の門番」(maternal gatekeeping)と両義的態度

父親がより育児にかかわろうとすることは、母親にとって当然望ましいことだと思われがちだが、必ずしもそう単純ではない。母親は父親の関与に両義的な感情を抱きうるとアレン＆ホーキンスは言う。

> 「女性たちの一部は、主要な育児者であることをいとおしくし感じるとともに、憤りを感じ、父親の参加によってホッとするとともに追放されたようにも感じる。彼女たち

[7] 舩橋恵子「「仕事と育児」バランスをめぐる男性意識」参照。

はより共同して分担するための交渉に、意欲的であると同時にためらいを感じる。男性がより家庭の仕事に関与するようになると、罪悪感とともに解放感を抱く」(A&H 202)。

そのため、母親はしばしば、父親のかかわりを意識的あるいは無意識的に抑制したり、夫の家事育児能力を信用しないため、結果的にそれを抑制することがありうる。これは研究者のあいだで、母親の「門番」作用と呼ばれている。アレン＆ホーキンスの定義によれば、「母親の門番」とは、「家庭の仕事における男女の協同しようとする努力を、男性が家事や子どもの世話を通じて学んだり成長する機会を制限することで最終的に疎外する信念やふるまいの集まりである」(A&H 201)。

では、なぜ母親は父親の育児への関与を歓迎しないことがあるのだろうか。それは母親が、社会や職場におけるのとは対照的に、家庭内のことがらに関して、特権的な地位と権力をもっているからであるという。母親は、たとえ「外で働いていても、低賃金、低地位、心理的報酬や昇進の見込みのない、また達成感のない仕事では、女性たちの妻や母としての価値ある役割の代わりになれないが、そこ［家庭］では、彼女らは置き換え不可能で、強い権威と力を行使できる」(A&H 202)。かりに母親が力をもつことを直接望んだわけでなくても、父親の家事育児へのかかわり方やその技術を低く評価したり、あまり期待しないことによって、「男性が家庭の仕事に対する責任を引き受ける気を失わせる一方」、母親自身は、パートナーの家庭の仕事を「管理し、基準を設けて、規制せ」ざるを得なくなる。こうして妻と夫の間にはしばしば、「管理者―ヘルパーという関係」が成立しているという。

「ある妻たちは、夫がする［家庭の］仕事を管理し、委託し、計画し、予定をくみ、監督することによって管理者(manager)としてふるまうことがある。[...] 彼女らの夫は、自分に要求されたことをするものの、頼まれるのを待ち、明確な指示を要求することでヘルパーとしてふるまう。このやりとりにおいては、[...] 彼女は彼の関与を管理し続け、彼をより多くの責任を取ることから遠ざけておく」(A&H 203)。

育児に限って言えば、このような母親の態度は、結果的に父親が、育児の中心部分にまでかかわり、「一次的な親」のひとりとなることを妨げるように働いてしまう。しかもアレン＆ホーキンスは、母親だけでなく男性自身も、このような男性の家庭での位置づけを歓迎し、その維持に加担している側面があると指摘する。つまり「カップルが共謀して、［性に］分化

した家庭役割を維持しようとする側面」である。父親は父親で、「[そのような母親中心の] 家庭の権力配分を変えることに抵抗する。なぜなら、彼らは家庭の仕事に責任を負う必要がないこと、それによってほかの興味を追求できることに価値をおいているからである」(A&H 203)。

3. 「第一の親」 (primary parent)

（1）子どもからの「指名」

上記のように、「母親の門番」の議論では家事と育児が一緒に論じられることも多いが、本稿の主題である育児に焦点を絞るならば、母親が父親にもっとも譲りたくないと思うのは、先ほど私たちが生殖の核と考えた、子どもとのもっとも緊密な結びつきなのではないだろうか。（それが結果的に家庭での代替不可能性や「地位や権力」につながっている側面は大いにあるだろうが。）つまり、子どもにとっての「第一の親」であること、言いかえれば、子どもがいざというとき、一番一緒にいてほしいと思う親であることなのではないだろうか。

『父親は母親をしうるか？』(Do men mother?) で、ドゥーセは、あるカップルの女性の次の言葉を引用している。そのカップルは、父親が途中から専業主夫になり、その女性に代わって家で子どもを見るようになったという。

> 「マーティン［パートナーである父親］が［育児のために］家にいることをはじめて決めたとき、私は脅威を感じました。[...] もし彼［子ども］が私の代わりに父親にもっとそばにいて欲しがったら、私はおそらく平静を失ったでしょう [...] 私はママでいたかったのです。私は夜中に彼［子ども］が呼ぶ人でいたかったのです」(Doucet 110)。

続けて筆者は言う。

> 「子どもの真夜中の泣き叫びに応えることには、親による保護と世話の核心に触れるなにかがある。起きて優しく泣く子どもに応える親――あるいは眠い子どもが抱っこしてほしいとせがむ親――は、養育を比ゆ的に凝縮したもの(encapsulation)である」(Doucet 111)。

子どもが元気で機嫌のよいときは、普段それほど接していない人も含めてさまざまな人と遊びたがったり、外に関心が向くが、疲れたり、眠かったり、具合が悪かったりすると、一番一緒にいてほしい人、一番緊密に結ばれている人を求める。すると、夜中に目が覚めて泣く子が求める親、あるいは転んで痛い思いをしているときに求める親、ドゥーセの言葉を用いれば、「「愛する」子どもに、「静けさ」と落ち着きをもたらす親が、[子どもとの] 情緒的絆と結びつきを体現している」（Doucet 111）と言うことができる。

ここには、親の側だけでなく、子どもの側の視点が加わっていることに注意したい。多くの時間を、子どもの必要に応えながら一緒に過ごし、情緒的な結びつきが形成された結果ではあるだろうが、最終的に子どもが、いわば「第一の親」を選び、「指名」しているとも言えるだろう。

子どもが自分を、自分でなくては駄目と必死に求めていること、このように子どもに「第一の親」に選ばれ、指名されることが、最終的にその指名された親に、どんなコストを払ってでも「第一の責任」を引き受けさせる重要な動機づけになっている。自分以外にだれもこの子を安心させてあげられない。自分がいないとこの子が引き裂かれるような思いをしてしまう。そのような、自分しかいないという使命感が、その人を第一の親にするという側面がある。そしてそれは、つねに母親であるわけでも、生みの親であるわけでもない。

（2）「第一の親」のコスト

指名されなかった親、二次的な親にとって、たとえば自分が抱っこする我が子が、自分ではない親を呼んで泣き叫び、身をよじらせるのを、半ば押さえつけるようになだめすかしてやり過ごす時間は、ひたすら耐え忍ぶ苦行の時間でしかないと言っても過言ではないだろう。自分は今この子に求められていない、それでもこの子には自分が必要だ、自分にはこの子を守る役目がある、と半ば自身に言い聞かせる姿は報われない片思いにも通じるものがある。

このときその親――多くは父親が、自分には子どもに対する、母親とは別の使命があると考えたとしても、無意識にそこに逃げ込んだとしても責められないだろう。社会の大勢が、それこそ父親のあるべき姿と考えているのならなおさらである。

多くの父親は、妊娠出産や授乳を経験していないことを理由に、子どもとの一番緊密な結びつきをはじめから諦めているところがあるが、もし専業あるいは兼業主夫になったり、シングルファザーになるなどして、子どもに自分が「指名」され、「第一の親」であることの

喜びと重みを知ってしまったらどうだろうか。今度はそれを手放すことに苦痛を感じるのではないか。専業主夫（婦）を途中で交代する、上記の母親が感じるのと同じように。

そのことはちょうど、女性が両性間の賃金格差、就職・昇進機会の格差を理由に、キャリアや仕事の達成感、社会的経済的地位等をはじめから期待しないことも多いが、それらをいったん手にすると、手放しがたいと感じうることと対照的な関係にあるだろう。すると、男性が代償を払ってもこれらを手放したがらないことを指す、先の「支配のコスト」になぞらえて、育児に関しては、女性が、仕事のキャリアや自分の時間の犠牲、責任の重さや重労働を代償に引き受けてでも、容易には手放したがらないこのことを、「第一の親のコスト」などと呼ぶができるかもしれない。

本稿が明らかにしようとしているように、もし母親と父親のあいだに、養育に関して、生物学的差異を土台にした、はっきりとした境界がないのだとしたら、母親だけでなく、父親も、養親も、だれもが子どもとのかかわり方次第で「第一の親」になりうることになる。このことを（それぞれ別の理由から）不都合に感じたり、不安に感じたりする父親や母親がある程度いて、境界線が取り払われることに共に抵抗するのが、育児に関する「門番」作用のひとつと言えるだろう。

（３）母親業(mothering)

それでは、そのような子どもとのもっとも緊密な結びつきは、妊娠出産・授乳の身体的過程によるのでなければ、どのように形成されるのだろうか。ルディックによればそれは、「母親業」という世話の実践を通じてであるという。既稿ですでに考察したので詳細はそちらに譲るが、ルディックは、生殖における重心を、産むことから、母親業に携わることへと移すことを試みたと言ってよい。言いかえれば、「母であること」を、産んだ人という固定されたアイデンティティから、母親業に携わる実践へと移し替えた。彼女は母親業を、子どもの基本的な要求を満たす「労働」あるいは「実践」とみなし、この実践が「当人の生活の重要な一部を占めている人」(Ruddick 40)は、だれもが「母親」であると考える。

> 「私の語法では、彼らが「母親」であるのは、母親業を定義する要求を満たすことに彼らが専心しているというだけの理由、その限りにおいてのみである」(Ruddick 17)。

そのことによって可能になったのは、性別にも、産んだかどうかという事実にもかかわら

ず、母親業に中心に携わる人を、そのかぎりで、「母親」であると考えることである。この考え方によって、「母親であること」はひとりの人に排他的に帰属されるものではなく、父親と養親を含むあらゆる人に開かれる、また複数の人が同時に、あるいは時期をずらして担うことが可能な、動的で、つねに変化しうる「状態」であることになる。

この考え方によれば、母親と父親、そして養親とは、ルディックの定義する「母親であること」の度合いによってしか異ならないことになる。つまり、父親も養親も、母親業により深く携わることによって、「母親」である度合いを強めることができるし、母親が母親業への関与を弱めることで、「母親」である程度を弱めることもありうる。そして両者のその度合いは、さまざまな環境や心情の変化によって、つねに変化しうる。

4. 「親」のグラデーション

「母親業」という実践に焦点を当てる見方は、出産の有無や性別、法的関係にかかわらず、育児に心身ともに深くかかわる人を、父親であれ、養親であれ、「母親」とみなすのであった。この見方は、本稿が主張するように、妊娠出産した母親と、そうでない父親のあいだ、さらに彼らと養親のあいだに固定化された境界はないことを明らかにする利点がある。しかしその反面、父親や養親を含むさまざまな「親」たちを隔てなく一律に見ようとするあまり、今のところ、「母親」の多数派である出産した女親を基準にして、ほかの親も見てしまいがちで、父親や養親の育児あるいは親子関係に現れやすい特徴を覆い隠してしまう難点がある。

母親と父親、彼らと養親のあいだに、親としての乗り越えられない差異はないとして境界線を取り払うことを目指す一方で、（性別役割分業の歴史や現状、女らしさや男らしさといったジェンダー意識、生みの親による養育をモデルとする従来の価値観、労働条件、労働現場での性的格差、あるいは養育環境などによって）現に現れている差異には敏感であること、そしてたとえば多数派である母親など、どれかひとつを典型あるいは「モデル」と見ないことを本稿は目指しているが、その一見相容れない二種の要素を同時に満たすのが、冒頭で触れた「グラデーション」という見方なのである。さまざまな要因によって、現状で、母親や父親、養親に色濃く現れやすい特徴はあるだろうが、それはたえず濃淡や位置を微妙に変えているグラデーション状のものであって、細かく見れば無数の差異でできており、どこのあいだにもはっきりとした境界線は引けないのだと言える。

ドゥーセがその著作で、題名でもある、「男性も母親をする(mother)か？」という問いを立て、これに肯定でもあり否定でもあると両義的に答えるとき、彼もまた私たちと同様の視点をとっていると考えることができる。彼は、ソーンが子どもの遊びに関して提唱する、「ジェンダーワーク」(gender work)と「ジェンダークロッシング」(gender crossing)という対概念を援用して、母親と父親の「類似性と差異」(Doucet 218)双方を考察する。ソーンは、子どもの観察を通して、遊びの場面で、女の子と男の子のあいだに明確なジェンダー境界が打ち立てられる時もあれば、その境界が緩み、ほとんど目立たなくなるときもあり、その境界は、作られたり壊されたりしながらたえず流動していると主張する[8]。

ドゥーセは同じことを、母親と父親の養育に関して主張しようとする。一面では、世間一般だけでなく、当の「父親も母親も、母親と子どものあいだに、［父親のと］異なる、根底的により深い結びつきがあると信じている」(Doucet 198))。多くの父親たちは、かなりの程度育児にかかわっている場合でも、「決して母親の代わりにはなれない」(Doucet 121)と思っている。しかし実際には、母親と父親のあいだの境界は思っているほど堅固ではなく、「かなりの程度の揺れがあり」、「信じていることと実践のあいだには分裂がある」とドゥーセは見る。ときに男性は、女性と同じように「母親をする」(mother)ことができる。とくに母親が長期的に不在の時には、「母親が抜けたスペースに父親はすんなりと入りこみ」、母親がするのと同様の「スキルを発達させることができる」(Doucet 133)。

しかも単に母親のやり方を倣い、母親にできるだけ近づこうとするだけではなく、しばしば男性に独特なやり方を展開することもある。たとえば父親の育児では、子どもを外に連れ出し、体を使った活動を通して自律を促したり、場合によってはあえて危険を冒すことを厭わないよう促す傾向があるとドゥーセは指摘する(cf. Doucet 133)。これは、子どもの生命の維持(preservation)と保護(protection)を育児の核とみなす従来の見方からすれば逸脱かもしれないが、その従来の見方はじつは多数派である母親の傾向を基準に形成されたものであり、父親の育児は、育児には本来、自律や危険を冒すという要素も含むべきことを気づかせてくれ、それによって育児の観念や典型とされたやり方を変容し、拡張してくれる可能性がある。

そして父親自身も、育児に深く関与し、「第一の親」（のひとり）となることで、自らの自己把握や、「男らしさ」についての考え方を徐々に変えていくことがあるのだと言う。

---

[8] cf. Thorne, *Gender Play*

「男性は子どもに全幅の責任をもつという意味の深さを知るようになりうる。この他者への責任こそ、男性としての彼らを根底的に変える。つまり、世話をする機会をもつことは男性のうちに精神的変容(moral transformation)とみなしうる変化を生じさせる。」(Doucet 206-7)

同書の、途中から家にいて子どもの世話をするようになった先とは別の父親はある変化について語っている。以前は、彼は「子どもが夜に泣いてもぐっすり眠っていたのが、家にいるようになって数か月後には、乳児の息子［...］が起きると彼も起きるようになった」と。彼は続ける。「私が家にいるようになって 2 か月後には、彼女［パートナー］は子どもが起きてももうその声が聞こえなくなってしまって、［今度は］起きるのは私になったんです。」「私には母親の耳があるようなのです」(Doucet 111)[9]。

すると、母親と父親のあいだの「ジェンダー境界は、子どもを自分自身で長い期間育てる父親に起こる感情やふるまいの変化によっても取り払われる」(Doucet 132)のである。本人がそれと意識していなくても。

父親が経験する変化はしばしば、育児に深くかかわることによって、自分が母のように、まるで自分が産んだかのように変化していると表現される。しかしそれは、一部の男性が恐れるように、育児によって「男らしさ」を失い、女性化しているわけでは必ずしもなく、育児と根本的には相いれなかった従来の男らしさを、それと相容れるように、あるいはむしろ第一の親であることを土台として「男らしさ」（そういう言い方がなお有効であるとしてだが）あるいは自分であることがはじめて形成されるような方向へと変容し、拡張しているのだと言えるのではないか。

逆の変容が、母親について言いうるだろう。父親が育児の核心にまで入り込み、新しい育児の仕方、子どもとのかかわり方を示すことで、母親には、従来男性にのみ開かれていた、育児から距離を取る「選択」の余地が生まれる。また母親らしさの典型から外れていた母親に、さまざまな育児の仕方があってよいし、そこから（一時的にであれ長期的にであれ）身を退く可能性があること、だれかに「第一の責任」の一部あるいは全部を託してもよいことを気づかせてくれる[10]。言いかえれば、母親のあいだにも無数の差異があってよいこと、あるい

---

[9] ほかにも、父親が育児の第一の責任を担っている場合、子どもへの反応や、子どもに対する感情、話しかけ方が母親のそれらと似てくるとする研究がある。柏木・若松「「親となる」ことによる人格発達」、柏木恵子『父親になる、父親をする』など参照。

[10] 望まぬ妊娠をした場合の新生児養子縁組や最後の手段としての「赤ちゃんポスト」の利用の問題なども

はむしろ、産んだ親と「第一の親」という意味合いが混然一体となった「母親」というカテゴリーが、そもそも無効であることを気づかせてくれる。

以上のことから、ドゥーセの主張を敷衍して次のように言えるのではないか。母親と父親のあいだの境界は、「妊娠、出産、授乳、産褥期などの、身体的、情緒的、象徴的な経験を参照して、育児の初期における、身体化(embodied)した側面に訴え」て、「父親も母親も、女性の子どもへの情緒的結びつき(emotional connection)に、象徴的にであれ実際にであれ、より大きな意味を与える」とき、動かしがたい確かな境界に見えるが、それは、ジェンダーや生物学的つながりに関係なく、だれもが育児に深く関与する日常の実践の中で、携わる者の自己把握の変容とともに、たえず変わりうるもので、その境界はなくなったり、あるいは男性の育児の傾向が反映されることで、また新たなところに境界が現れ、そしてそれもいずれは薄れたりする、「満ち引き」(Doucet 134)のようなものなのである。

5. 複数から成る「第一の親」——養親子における子どもの視点から

ここまでは、父母にせよ、養親にせよ、主に親の側から考察してきた。また妊娠出産そして授乳という身体的過程は生殖の核ではないと考えてきた。母親業がその人の生活の主要部分を占めることを「母」＝「第一の親」の定義と定める見方は、母親と父親の、そして生みの親と育ての親とのあいだの境界線を取り払い、誰もが母親業を通して「第一の親」になることを可能にする利点があった。しかしそれはあくまで、親あるいは第三者の視点からの定義であり、そこには当の子どもの視点が欠けている。子どもが、母親業に専心している人を、それにもかかわらず「母」あるいは「第一の親」と認めないか、一点の曇りもなくそう認めることをためらう場合が考えられる。それはどんな親子でも起こりうるが、親の見方と子どもの見方がもっともすれ違いうるのは、養親子の場合、あるいは生殖技術を介して第三者が子の誕生にかかわっている場合であろう。なぜなら、たとえ養親が、生物学的なつながりよりも、母親業の実践を通じた子どもとの結びつきこそがその人を真の親、第一の親にするのだと考え、そのように子どもと接しているとしても、子どもの方が、生物学的なつながりや産むことを特別大事に感じている場合があるからである。養親は、(不妊や、子育てへの関心、施設にいるあるいは入る予定の子どもを引き取りたいなどの思いから) 養子を育てる決断をし、そ

念頭に置いている。次の拙稿参照。”Reinterpreting Motherhood: Separating it from Giving Birth”

の子の親になる覚悟を徐々に育てることで、生物学的なつながりや出産したかどうかを重視する伝統的な価値観から距離をとっていったかもしれないが、子どもは逆に、幼少時は養親の考えを自然と受け入れていても、学校を始めとした外の世界と接するにつれて、伝統的な価値観をも内面化して、友だちの大多数と自分との差が重大なものに思えてくる可能性がある。「なぜ自分だけ、生みの親と一緒に住んでいないんだろう」、「なぜ生みの親は自分を手放すことができたんだろう」[11]と。

その上、養親とその養子とのあいだには根本的な非対称がある。単純化して言えば、(その子との親子関係においては）養親はその子どもだけを見ているが、子どもには養親と生みの親の双方が、自分にとって重要な意味をもつ存在だと感じられる、つまり、ずっと一緒に過ごしてきた目の前の養親が「親」のすべてではないことがありうる、という非対称性である。養子にとっては、自分の「親」という観念を形成する上で、あるいは特別の情愛や思慕を向ける上で、養親と排他的に競合しうる、生みの、あるいは産みの親がいるのである[12]。

ただ、正確に言えば、養親には養子が複数いる場合もあるし、養子に加えて実子がいる場合もある。そもそも養子であろうがなかろうが、ひとりの「母」、あるいはひと組の両親に子どもが複数いることは珍しくない。そうだとすれば、親にとっては子どもが複数いること、その各々に同じくらい愛情を注ぐことは極めてありふれたことなのに[13]、子どもにとって、自分のアイデンティティに欠かせない特別な存在である「母」が複数いたり、それが生みの両親以外であったりしてもよいはずではないか。排他的な、たったひとりの「母」、あるいはふたりきりの「親」という考え方こそがおかしいと考える余地があるのではないか。

じっさいにパークは、自身の養女との関係の考察をきっかけに、「複数の人から成る、多様な「親」」(multiple, diverse, parents)(Park 172)という見方を子どもが養うのを手助けすることが親には必要で、それが子どもにとっての「本当の」(real)親となる過程でもあると論じ

---

[11] 次のビデオの当事者の言葉を参照。『ヒューマンドキュメンタリー 私の“家族”』、NHK 厚生事業団福祉ビデオライブラリー

[12] この非対称性がずっと小さい場合が考えられる。それは、1970 年代に頻発した赤ちゃん取り違えの場合である。この場合は、親の方も選んだわけではなく知らずに「養親」として実の子でない子を育てていたことになるし、何より、他の夫婦に育てられた実の子と、自分たちで育ててきた子どもとのあいだで引き裂かれ、それら競合しうる複数の子どもが、「自分の子ども」という観念を形作ってもいるからである。ただ、映画『そして父になる』のモデルとなったと言われる、ノンフィクション、『ねじれた絆』の二組の夫婦は、悩んだ末に子どもを交換して、互いに密に交流することを選ぶが、それは親たちが決めている。

[13] もっとも（一部の）実子と離れて暮らす代わりに、パートナーの子を（も）養育しているステップファミリーの親の場合はより複雑で、子ども同士が排他的に競合することもあるかもしれない。しかしそれでも、後に見る理由で、養子から見た複数から成る親とは完全には対称的ではないと考える。

る。

パークは、「母親」に関する、生物学的な「母」かそれとも養育を中心とする社会的な「母」か、端的に言えば、「自然か養育か」(nature-nurture debate)(Park 175)という、排他的で二元論的な見方に警鐘を鳴らす。なぜなら、これらの「どちらかの台本に忠実であることは、子どもに彼らの人生のうちの誰かに不誠実であることを要求する」(Park 175)からである。つまり「母親」が、自然の母か養育の母かの二者択一であるとすれば、子どもはどちらかを主に選んで、もう一方には「不誠実である」ことを強いられてしまう。パークの言葉を用いれば、「忠誠が分割されてしまう」(Park 173)。具体的には、養親に遠慮して、生みの親を想い、会いたいと思う気持ちを押し殺したり、逆に、生みの親に悪い気がして、養親もまた本当の親だと心から受け入れることにブレーキをかけたりする場合があるだろう。

パークの養女も、子どもたちをとりまくポップカルチャーの影響を受けて、「自分にはひとり、たったひとりの母しかいるはずがない」(Park 174)という頑なな信念を形成していた。そしてパークの実子で養女の「妹」に当たる娘もまた、生物学的なつながりを重要視して、半ば無自覚に姉に対する優越感を抱いているようだった。パーク自身は、育ての母を扱ういくつかの童話の検討を通じて、最終的に『チョコの母』(A mother for Choco)という物語に共感し、真の母親は母親業という「社会的営み」を通じて形成されるものだという、上で見たルディックに代表される考えに至っていた。しかし意外にも、養女はこれを受け入れない。その理由を、今度は養女自身の視点に沿って探り直してみたところ、パークは三つの理由に思い至る。

第一に、「この社会的母親という物語からは、子どもの生みの母が目立った形で消えている」ことである。「子どもの視点に立てば、生みの母親を消し去った物語は信じがたく倫理的に疑わしい」(Park 180)にちがいない。養女にとっては、生みの母は重要な意味をもっているのだから、養親の視点にのみ従った考え方は、パークの「娘自身の語りの文脈、そこでは産みの母が自分自身のアイデンティティの鍵として顕著に現れる文脈を過小評価している」(Park 180)ことになる。そのようにして、暗黙の裡に、「母」が複数の人から成る可能性を、ここではとくに産みの母をも含みこんだ「母」の概念を、子どもが形成する可能性を排除してしまっていることになる、と思い至る。

第二に、『チョコの母』では、養子が自分の意志で育ての家族を選んだように描かれているが、「現実には、養子がこのような決断に何らかの影響を及ぼせることはまれである」(Park 180)。するとこの物語は、この点では「養子の経験をねつ造している」ことになると気づく。

パークは、「選び」に関する養親子間の非対称性を次のように指摘する。

「養子縁組をした女性たちは、重要な意味で母親であることを選んでいる。さらに彼女らは、養子縁組のために提供された子どもを受け入れたり拒否する権利を行使する。他方、養子は、その家に置かれ、彼女らに馴染むよう運命づけられる。じっさいに、私の娘の怒りの一部は、彼女が自分の家と家族を選べないことに由来しているのだと説明することができた。いかなる子どもも自らが生まれる環境を選べないが、養子の経験には、特別な意味での欲求不満と喪失が付きまとっている。彼らは選択肢があったことを知っているのだから。彼らは単に介入することができなかっただけなのだ」(Park 179)。

たしかに養子になる際の年齢によっては自分で判断することはできないし、できたとしても子どもの意見や好き嫌いを反映させることは現実的には難しいかもしれないが、問題は、関係を選択する余地があったかどうかという点に非対称性があることだろう。先に、養親と養子の関係の非対称性に言及したが、それを形作っているもうひとつの重要な要素は、関係を選択する余地の有無であると言える。

だからこそ、産みの母、育ての母以外の他人たちも含めた、「複数から成る母」という観念を養子が形成することを許す、あるいはむしろ促す重要性をパークは主張するのだろう。養親は、養子縁組という関係の成立（あるいは第三者のかかわる不妊治療の施術）前に熟考し、決断し、選択するのだとしたら、養子は、いわば関係が成立した後から、事後的に、自らの「選択」を時間をかけて遂行するのだと言えるだろう。ただし、生みの親か育ての親かという排他的な、たったひとりを選びほかは捨てる選択ではない。自分のアイデンティティを形作る上で不可欠な人物を、「母」の観念のうちに自分の意志で自由に組み込み、その比重やかかわり方[14]を柔軟に変えていく、そうした「選び」を通して、法的ではない、より複雑でしかし充実した関係から成る「母」あるいは「親」を形成していくのだと言ってよいだろう。

そして最後の理由は、「『チョコの母』が、養子が養親の家族の中で抱く違和感(sense of difference)からくる恐れや不安を過小評価している」ことだと言う。愛情のこもった母親業を通して真の親子や家族になれるのは理想だが、現実には子どもは、互いに「「似ている」

[14] 米国をはじめ海外では、養親子と生みの親が手紙や会って交流を継続する「オープンアダプション」が行われている。日本ではようやく、養子を斡旋した民間団体を介して手紙などの交流をする「セミオープンアダプション」が始まったところである。cf. 原田綾子「養子縁組のオープンネス」、ＮＨＫ厚生文化事業団福祉ビデオライブラリー『新しい絆の作り方 特別養子縁組・里親入門』

（あるいは少なくともそう見える）人たちの中にいて「他者」である」(Park 181)と自分を感じざるをえない経験をしばしばするという。パークは自身の養女の場合を次のように告白している。

養女は宿題をやりたがらないが、そもそも彼女にはじっと座って集中することが難しかった。「本当のお母さんなら私にこんなことさせない！」と彼女に反抗され、疲弊しながらも、「産みのお母さんもあなたに宿題をやってほしいと思っているはずよ」と諭し、後日、手紙での交流のある産みの母に、それを肯定し、宿題をやるよう促す手紙を送ってもらう。ところが別便でパークのみに送られてきた手紙には、じつは自分も子どもの時、学校に関する困難を抱えていたという告白が綴られていた。それを見てパークははじめて、自分や自分の家族が難なくでき、重要だと思っている勉強が、養女にとってはそうでなく、多大なストレスになっていることに気づく。そして彼女が言う通り、産みの母なら「彼女の悩みにもっと共感できただろうに」(Park 181)と痛感する。

しかしだからと言って、やはり生物学的つながりが一番だと、二元論的枠組みでの二者択一に後戻りするわけではない。こうした違いを認めてもなお、「違いを超えた共感によるつながり」(Park 182)は可能だとパークは信じるのだが、そのためにもまず、互いに似ている家族の中で子どもが感じているかもしれない違和感を軽く見てはいけないと、自戒を込めて警鐘を鳴らす。「［養子の］子どもの［家庭の規則に］順応しない振る舞いは、善くも悪くもないのであって、単に彼らの必要(needs)や才能の現れである」と気づく必要があるし、「子どもがその家庭の規則に反発したり、それに従う能力がないのは、子どもの側の困難というよりも、規則自体の困難を示しているのかもしれない」(Park 183)と省みる必要があるのである。そうした家庭環境でのみ、「子どもは自由に、恐れることなく、複数の母を、自分自身のための存在(being-for-herself)へと組み入れることができる」(Park 189)のだと結論づける。

以上で考察されているのは養親子の場合だが、それ以外の親子についても、程度の差はあるにせよ当てはまるところがあるだろう。そしてそのように、父親や養親子の側から翻って生殖全体を見渡すことは、本稿の目標のひとつであった。じっさいにパークは、「母」を形成する複数の人々として産みの母や生みの両親ばかりではなく、そのほかの「他人という母たち」((m)others)をも想定している。祖父母や叔父叔母（伯父伯母）であったり、保育士や先生、近所の人、ベビーシッターであったり、さまざまな人々が、かかわり方や、与える影響あるいは安らぎによって、子どもの存在にとって欠かせない「母」あるいは「第一の親」に

なりうるし、そのような「第一の親」を子どもが形成するのを妨げずに、むしろ助ける必要があると言うのであろう。そして、父親も養親もそれ以外の人々も、子どもにとって「第一の親」となりうるし、そのような複数性あるいは複層性は、養子の子どもにもっとも顕著に現れるとしても、じつはどの子どもにとっても必要なものなのだと言える。そしてそれは「親」が、母親業に専心し密な関係を築くことによってのみ達成されるとはかぎらず、じつは子どもの側から、自分の存在の形成に欠かせないと欲せられる必要のある、双方向の営みなのである。この点で、母親業への深いかかわりはほとんどの場合必要であるが、必ずしも必須というわけではないと言える。

おわりに

母親業を通した子どもとの心身共に緊密な結びつきが「第一の親」を形作ると言うと、では、愛情は人一倍あるけれど、離れて暮らさざるを得ない親は「第一の親」に入らないのかと反論されることがある。長期入院している母親や、生活費を稼ぐためにやむなく祖父母に子どもを預けて別居する親、出産後事情があって子どもと引き離されるも、子どものことを片時も忘れないでいる母親、離婚後、子どもに会えないが、子どもの写真や子どもからもらった絵を肌身離さず持ち歩き、生きているうちにもう一度会えるかも分からない子どもに恥ずかしくないようにとひとりで生きる父親など。前節で見た生みの親の一部もそうであろう[15]。だから前節最後で、母親業を通じた子どもとの緊密な結びつきの形成は、第一の親であるためにほとんどの場合必要であるが、必須ではないと書いた。

ただそのような場合、毎日の母親業を通じて緊密な結びつきを形成している親子と、愛情がどちらが大きいとは一概には言えないが、関係や想いの性質が微妙に異なっているとは言えるのではないか。私事になるが、七歳の子どもと、海外と日本に分かれて四十日程暮らしたときを思い出す。その子のいない日常に徐々に慣れるなかで、愛情が減るわけではまったくないが、想いの質あるいは関係の質が微妙に変わっているのに気づく。いてもたってもいられないくらい心配で、会いたいし、何かしてあげたいと思う反面、その子が悲しんでいないで、楽しんでおり、きちんと世話をしてもらっていることを把握し、自分が今この状況

[15] 事情があって育てられないために新生児養子縁組をすることを決めたものの、出産後いざ養両親に引き渡す段になると、なかなか赤ちゃんを渡すことができない産みの母親も多いという。cf. NHK 厚生文化事業団福祉ビデオライブラリー『パパとママがほしい ～大阪・乳児院の 1 年～』

でしてあげられることはそれほどないと分かると、その子のことが頭からすぽっと抜けている時があるのに気づいて驚く。これは、そのときの「第一の責任」者（の少なくとも筆頭）が自分ではなかったということではないかと思う。七年間一度も、その責任の過半をだれかに託したことはなかったけれど。そのときの私はたしかに、その子にとっての二次的な親であったと言える。「第一の責任」を、自分ではない誰かがきちんと果たしてくれているという安心と…一抹の寂しさ。私の場合は短期で疑似的な体験の域を出ないけれども、おそらく別居している祖父母や、あまり子どもとかかわれない父親の心境と通じるものがあるのではないか。だから同じ祖父母でも、同じ父親でも、そして母親でも、そのカテゴリーだけから、子どもとの結びつきの強弱を一概に言うことはできない。そして一緒に過ごした時間、世話の質や量、親の想いの強さなどと、子ども自身が形成する「第一の親」の（こう言ってよければ）占有率が必ずしも一致するとはかぎらないからさらに複雑である。

『ねじれた絆』では、病院で赤ちゃんの取り違いをされた両家は、子どもを交換して数年後には、同じ敷地内に住み、交流を密にすることを選ぶが、その生活のなかで、ふたりの娘がともに片方の母親とのかかわりに心情の面でも交流する時間の面でも重心をおき、もう一方の母親や父親とのかかわりの比重を少なくしていく。ふたりがともに結びつきを保持する母親は、ひとりにとっては産みの母であり、もうひとりにとっては6歳までの育ての母である。二人の子どもがともに複数から成る「母」あるいは「親」を形成し（そうすることを半ば環境に強いられ）、その上で、一方にとっては産みの母、他方にとっては育ての母という同一人物とのかかわりの方を選んでいく。複数から成る「母」というのはこのようにつねに流動的で可変的でもあるだろう。おそらくふたりの娘が片方の同じ母親を選んでいく過程では、家庭環境の善し悪しだけでなく、彼女の母親業を通したふたりとの関係の構築がうまくいっていたという要因が大きいだろう。そうだとすれば、まだ産みの母、生みの親に会っておらず交流していない養子にとって、生みの親は自分の生の始まりにきっかけを与え、妊娠出産をともに乗り越え、また多くの似た性質を共有しうる点で、自分のアイデンティティの形成にとって不可欠な存在であることはまちがいないが、彼らと交流を重ね（双方の事情でうまく交流できない場合も含めて）、自分自身も経験を重ねる過程で、自分の「親」の観念や、そのうちの比重の置き方などはつねに変化するもので、どのように変わっていくのかは、それぞれの場合によってまったく異なるのであろう。この意味でも、生みの親か育ての親かという、排他的で二元論的な見方は、「親」を考える上で有効ではないと言える。

そしてそうした時期や状況による変動は、親の側にも同様にあるだろう。子どもの年齢や、子どもの必要によって、そして親の余裕や世話の熟練度によって、だれがどれだけどのようにかかわるかはたえず変動する。こうして、親をはじめとする大人側と子どもの側の想いや認識はときにすれ違いつつ、ときに共鳴し連動しながら、だれかが参入して、だれかが退去するといった入れ替わりも含めて、「（第一の）親」を形作っていくのだろう。それは排他的でも、固定的でもまったくなく、正確に言えば、どこまでが親で、どこからが信頼できるメンターなのかも線が引けないほど、またその形態の全容を一時でも正確につかみ切れないほど、たえず流動するグラデーションを成しているのだと言える。このように親であることが、変動しつつ積み重ねてゆくもの、ある意味ではたえず更新しつづけなければならないものだとすれば、産んだ母親も、生物学的親も、養親も、本質的にはそう大きく変わらないとも言えるのではないだろうか。

参考文献

S. M. Allen and A. Hawkins, “Maternal gatekeeping: mother’s beleifs and behaviors that inhibit greater father involvement in family work,” in *Journal of Marriage and the Family,* 61, 1999

A. Doucet, *Do men mother? : Fathering, Care, and Domestic Responsibility: Fatherhood, Care, and Domestic Responsibility,* University of Tronto Press, 2006

T. Miller, *Making sense of fatherhood: gender, caring and work*, Cambridge University Press, 2011

M. Naka, "Reinterpreting Motherhood: Separating it from Giving Birth," Kobe University Social Science Research Series, Risk and the Regulation of New Technology, Springer, 2020［刊行予定］

S. Park, “Real (m)othering: the metaphysics of maternity in children’s literature,” in S. Haslanger & C. Witt (ed.), *Adoption matters: philosophical and feminist essays*, Cornell University Press, 2005

S. Ruddick, *Maternal thinking: toward a politics of peace,* Beacon Press, 1995

B. Thorne, *Gender play: girls and boys in school*, Open University Press, 1996

奥野修司『赤ちゃん取り違え事件の十七年 ねじれた絆』、文春文庫、2002 年

多賀太『男らしさの社会学 揺らぐ男のライフコース』、世界思想社、2006 年

イレーヌ・テリー『フランスの同性婚と親子関係 ジェンダー平等と結婚・家族の変容』、明石書店、2019 年

柏木惠子・若松素子「「親となる」ことによる人格発達―生涯発達的視点から親を研究する

試み」『発達心理学研究』5、1994 年

柏木惠子『父親になる、父親をする—家族心理学の視点から』岩波ブックレット、岩波書店、2011 年

原田綾子「養子縁組のオープンネス」、『民商法雑誌』138, 2008 年

中真生「「産む性」をめぐって——生殖と「母性」再考」、日本現象学会『現象学年報』、34 号、2018 年

中真生「「母であること」(motherhood)を再考する——産むことからの分離と「母」の拡大」岩波書店『思想』、2019 年 5 月号、2019 年

舩橋恵子「「仕事と育児」バランスをめぐる男性意識」、目黒依子、矢澤澄子他編『揺らぐ男性のジェンダー意識 仕事・家族・介護』新曜社、2012 年所収

松木洋人「「育児の社会化」を再構想する—実子主義と「ハイブリッドな親子関係」」、野辺陽子、松木洋人他著『＜ハイブリッドな親子＞の社会学 血縁・家族へのこだわりを解きほぐす』、青弓社、2016 年所収